

みなさん「ツタンカーメンのエンドウ豆」って聞いたことありますか？

「ツタンカーメン」といえば、もちろんエジプトの王家の谷から発掘された古代エジプトの王様の名前です。1922年イギリスのカーナヴァン卿の支援を受けた考古学者ハワード・カーターにより発見、発掘されたのですが、ツタンカーメン王の墓は三千年の時を経ても副葬品がほとんどそのままに発掘されて、とくにその黄金のマスクによって世界的に有名になりました。

そして「エンドウ豆」というのは、その墓からはエンドウ豆も発見されて、発見者カーターが持ち帰って、発芽・栽培に成功したと言われているのです。人によっては三千年もの長期間ののちに豆の種子が生存することに疑義を呈し、「豆自体もエジプトで自生している野生種であり、直系の種と言われても判別はつかない」という夢のない話もありますが……。日本には戦後に伝えられ、古代ロマンの夢を託しておもに小学校や教育センターを通じて広がったそうです。ムラサキエンドウとも呼ばれ、葉は普通のエンドウとよく似ていますが、花やさやが紫色になります。

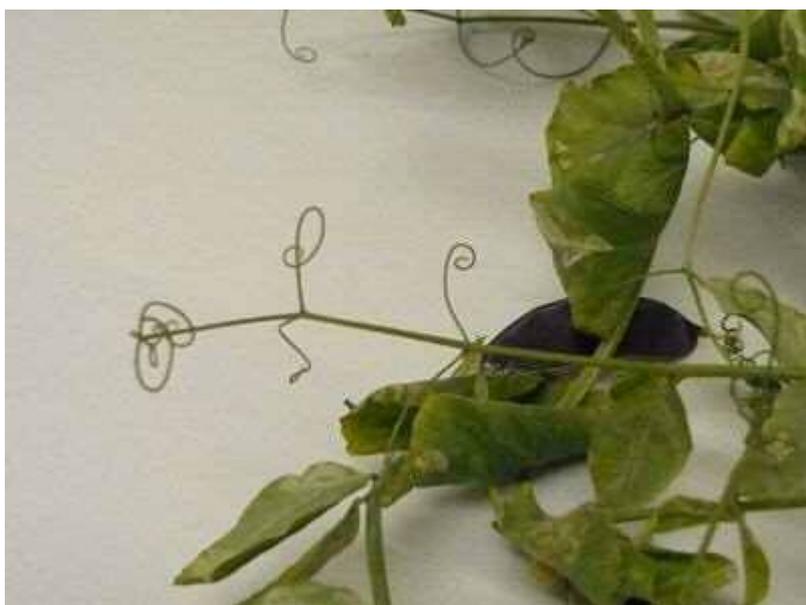


そしてこの豆を使って、豆ご飯を炊くと炊きあがりは普通と変わらないのですが、保温しておくとアラ不思議！赤飯のような色になるのです。とてもおいしかったですよ。



さて、現在愛知県美術館のロビーには《ツタンカーメンのえんどう豆》という彫刻作品が展示されています。

この作品の作者は愛知県瀬戸市出身の加藤昭男さんです。加藤さんは1995年に心臓病のために倒れ、救急車で運ばれて入院、そして療養生活を送るという生命の危機を体験しました。この体験はそれまで彼が主題としてきた人間と自然、生命というものを見つめ直す機会ともなりました。偶然の事ながら加藤さんの家では副葬品の「ツタンカーメンのエンドウ豆」の子孫の種子を譲り受けたのでした。永い眠りの年月を経て発芽したエンドウ豆に生命の復活を見、生命の危機を乗り越えた自分と重ね合わせて、退院後しばらくしてから、この作品を制作したということです。



愛知県美術館は、現在の所蔵作品展で東日本大震災で被災した地域の人々に寄り添う気持ちを込めた展示を行っています。「危機を乗り越える」という主題のあるこの作品を展示に加えることで、東日本の復活、復興の願いを込めました。もちろんそうした意味ばかりでなく、エンドウに留まった蝶々のゼンマイ状のくちとエンドウ豆の巻いている蔓、羽と葉という造形的な響き合いなども鑑賞していただけたらうれしく思います。

(S.T.)